

ジヨアンは静かに、泣いているたえの肩に手をかけ、振り向かせた。

「子が親を恨むなど、あるはずがありませんようか。このさきさんも仰いますように、それはあなたが生きる上で、逃れようがなきこと。この乱れた、はかなく厭わしき世界に生きるがゆえに、人はみな、罪穢れを負うております。肝要なるは、己が負いたる罪に気づき、悔い改めること。我らすべての母なるサンタマルヤは、大いなる慈悲の心でお救いください、御主なるデウスに我らの贖罪をとりなしてください」

「このお方が？」
たえは顔を上げ、あらためて聖母子の画像を見つめた。

「ほんなら、このお方が、冥途でうちらの子をお守りくださつとんかいの」

「いいえ、罪なき幼子の魂は、地獄には参りません。聖霊の導きにより、天の御国に上っておりますよう。そしてあなたが御国に上られ、来世で再びみえるのを待っておりますよう」

「ほんまな、それは有り難い」
たえは目を伏せて、画像に向かつて手を合わせた。さきと、回りの女中たちも、同じように手を合わせた。

その光景を、奥から出てきた東次郎が、黙って眺めていた。

その日の説教は、それで終わりになったが、夜、東次郎は、寝間でたえに言った。

「おたえ、あのな、儂、子どもがおらんでもかまんのやで」

「お前さま？」

東次郎の、いつになくしみじみとした口調に、たえは不思議に思つて顔を見た。

「ぬしは、ほんまによう働いてくれとる。気働きもええ。儂は、ぬしのそういうところがええのや。そら最初は、器量がええのが気に入って後添えにしたんやけどな。今はそんなん、どつちでもかまへん」

「お前さま」

たえは、何と言つていいのかわからず、ただ黙つて東次郎の言葉を聞いていた。東次郎は、そこで口調をあらため、

「そやさかい、なんや、ぬしが、もし、子どもができんのを気に病んどんのやったら、それはかまへんのや。ぬしに子ができんでも、おさきや他のおなごにできたら、ぬしの子として家に入れたらええ。何とて丈夫でおつてくれたらええんや。前の女房は体が弱うて、はよ死んでしもたさかいな」

「お前さま、昼間の話を聞いとられたんな」

「うむ」

東次郎は、何がなし気恥ずかしいようにうつむいた。

「そやからな、気に病むなよ」

そういつて、くるりと背を向け、布団にもぐり込んでしまった。

たえは一人、布団の上に座っていた。東次郎が自分を慰めようとしたのはわかった。働き手として、宿の女将として認めてくれているのもわかる。けれども、なにか寒々とした気持ちが起こるのは抑えようがなかった。

さきくに子ができれば、養子にせよと言う。さきが、そう悪い女ではないのはわかっている。それでもやはり、子を挟めば、同等の思いではいられまい。生みの母が、育ての母がという争いになるだろう。その時に、東次郎はどちらにつくか。それもまた、東次郎の気心一つなのだ。

「うちは、どないしたいのやろ」

自分もまた、古来より女が苦しめられてきた嫉妬と瞋恚の思いに悩まされるのかと、たえは己の身を哀れんだ。

明くる朝、日も高くなつた頃である。

「女将さん、おさきさんがおらん！」

と、別棟の女のひさが、裏木戸から駆け込んで来た。

「おらんで、なに？」

驚いて聞き返すたえに、

「いつんなつても起きてこんし、寝間のぞいたらおらへんねん」

と、ひさはおろおろと言う。たえは、屋内へ向かつて

「ちよつとあんたら、おさきがこつち来てるの見たかいな？」

と呼びかけた。下男や女中の

「今日はまだ見てまへんで」

という声が口々に聞こえてきた。

「どないしたんやろか」

ひさは、口に手を当てて眉を寄せた。

「どないもこないも、ええ大人なんやし、そない気いもむことないがな。そのへん歩いとんのやろ。どこ行くあてもあれへんのやし」

たえは、さりげなくそう言った。

「けど、もしや海にでも落ちとつたら」

ひさは、なおも心配そうに言う。たえは、あえて
平静な顔で

「そんなことあったら、誰か船頭さんが知らせに来
てくれるわ。あんたはもうええさかい、戻るとき
と、ひさの肩を叩いて言っつてやった。」

さきやひさらの女たちは、金で買われてきたもの
だが、特に借金の証文で縛っているわけではない。
衣食住の面倒をみる代わりに客を取らせ、その上
が、宿に入る。逃げようと思えば逃げられるのだが、
宿を出ても行く先もないような境遇の女ばかりだ。
雇い主にしてみれば、身寄りのない者を養ってやっ
ている、慈善事業だと言うだろう。

だからたえも、さきがないと言っつてもそんなに
心配はしていない。湊から船に乗るとしても、金も
持っていないのだ。それに、船頭は船に女を乗せる
のを嫌う。

宿の部屋の掃除をし、泊まり客が出て行くのを見
送り、

「そろそろジョアンさんが説教に降りてくる頃合
いやな。今日はどんな話をするのやろ」と考えてい
た時。

「女将さん、あのパーデレさんはどないや」
と、船にカブラルとジョアンを乗せてきた船頭のさ
へえがやってきた。

「ああ、さへえさん、お早う。いや、あの年かさの
お方は、ずっと臥せったままやで。ご飯食べにも降

りてきよらんわ。何や、召し上がりもんが違うさかい、かまわんでくれてジョアンさんが言うて」

「ほんまな。ぼちぼち堺行きの船が来る頃やしな。ちようどそれに乗れるぐらいに、治つとつたらええんやけどな」

さへえは言つて、ふと思ひ出したように

「ああそうや、湊で、ここのおさきを見たで。なんやぼーつと立つとつたけど、あの子が朝から出てくんのは珍しいな。夕方、客引きに来るんはよう見るけど」

「おさきが？　ほんまな」

たえは驚いて、近くにいた女中に

「ちつと湊まで見てくるわ」

と言い置いて、泊の湊の船着き場まで走つていった。

朝の湊に入船は少なく、帆を張つて出て行く船が大半である。朝靄が晴れた空の下、まだ冬の名残を残す深い青色の海面に、白い帆影を映しながら、船が次々と出て行く。その光景を、浜に引き上げられた小船の舳先に座つて、ひとり眺めているさきの姿があつた。

「おさきさん！」

たえが呼びかけると、さきはゆつくりと振り向いた。髪は背中に梳き流したままで束ねもせず、着古

した、白地に紅梅を散らした小袖を着たのも昨日と同じ姿である。どこへ行くこうという格好でもなかった。たえはとりあえず安心した。

「女将さん」

自分を探しに来たたえに、さきはちよつと驚いたようだ。

「おさきさん、そこで何しよるん」

「ちよつと、日に当たりとうなつてな」

さきはそう言つて、また視線を海の方に向けた。

「ほんまな。あんたがおらんで、ひさちゃん心配しよつたで」

たえは言つて、さきの傍らに歩み寄つた。

「あんた、どないしたん」

「ちよつとな。昨日、おたえさん見よつたら、昔のこと思い出した」

さきは言つて、小袖の懐から取り出したものを、たえに見せた。その手のひらには、鈍い銅色の、鎖に下がった小さな十字架が乗っていた。それを見たたえは目を見張り、

「これ、ジョアンさんがおんなじもん持ってた。

天主教のお数珠や！」

「お数珠と違う、クルスいうんやで、これ」

「ほなあんた、天主教やつたんか！」

たえは驚いて、クルスとさきの顔を何度も見直し

た。

「ちやんとした信徒と違ちがう。入信の誓いもたててへんしな。ここへ来る前、赤穂におった時に、ちよつとだけ惚れた男にもろたんや」

「まあ」

「その人な、天主教の同宿（聖職ではない伝道人）て言いよつたわ。うちがおつた宿に来てな、こんな商売しとつたらあかんて。身を清く、正しい暮らしをせよ、そしたら来世で救われるいうて、なんべんも言いよつた。なんでこない世話焼きなんやろ、うちに惚れとんのかいなつて、ちよつとうれしかったわ」

さきは、少し照れくさそうに笑つてうつむいた。

「そない言うのやつたら、うちを連れて行って、あなたの女房にして言うたら、この次に来たときに一緒に行こ、これが証や言うてこのクルスくれてな。うち、これ持って何日も何日も待つとつたんやけど。それつきり、来んかつたわ、その人」

「何で？」

たえが聞くと、さきは首を振つて、

「わからへん。その時は、ああ、うちが嫌んなつたんやな。こんなおなご、連れて帰つたらあかんのやなて。人を救う救う言うというて、性根ができてないやつや、てずつと思つてたけど」

「それであんた、天主教も浄土真宗もおんなじや、
言うてたんか」

たえは合点がいった。さきは小さくうなずいた。

(以上5月9日放送分)